「ヌガー・グラッセが溶けるまで」

◆登場人物

小林瞳　（２９）：都内の中小企業の事務
足立結憂（２９）：老舗旅館「山浦温泉 あだちや」の女将
足立直政（３１）：足立結憂の兄
三木典子（３３）：足立結憂の元マネージャー
斉藤裕次（２９）：足立結憂の婚約者
吉本圭一（３０）：足立結憂のファン
高木明希（３０）：足立結憂のファン
近藤貴之（２８）：老舗旅館「山浦温泉 あだちや」の従業員

◆舞台設定◆

雪深い山奥に立つ老舗の温泉旅館「山浦温泉 あだちや」。フロントから客室へ向かう途中にある、休憩スペースが今回の舞台。舞台上にはテーブルと椅子、ソファ、マンガや雑誌などが入れられた棚、ピアノ、ギターなどが備え付けられている。入り口は上手と下手奥の２箇所。上手からはフロントや大浴場、下手奥からは客室などにつながっている。

プロローグ

暗転中。テレビ番組のニュース報道が流れてくる。

「元歌手、足立結憂さんが自身の経営する老舗旅館「山浦温泉 あだちや」で殺害された事件を受け、警察当局は都内在住の事務職、小林瞳容疑者を逮捕したと発表しました。彼女がこのような凶行に至った背景とされるのは…」

明転。ノイズの混じったニュースの音が小さく流れている。舞台中央に小林瞳が座っている。

小林　くだらない。両親が子供の頃に離婚したとか、母親からなにをされたかとか、子供の頃にいじめられたとか。じゃあ片親の子供は大人になったら人を殺すの？虐待された子供はみんな必ず人を殺すの？いじめられた人たちは人を殺す運命にあるの？バカバカしい。そんなの子供のころの話。調べたいなら、好きに調べてもらっていいけど。私はその話はしない。だって重要じゃないから。知りたいなら教えてあげてもいいけど。でもそれは去年のクリスマス前のことだけ。

後ろで他の人物たちが登場し、「山浦温泉　あだちや」の風景を演じはじめる。

ニュース報道の音が聞こえてくる「足立結憂さんは15歳で衝撃的なデビューを飾り、22歳にして引退を発表。人気絶頂の最中での引退に、多くの惜しむ声が日本中から集まりました」

小林　12月7日と8日、私は「あだちや」で2日間を過ごした。足立結憂を殺すために。

小林瞳が鼻歌を歌いはじめる。

小林　私が信じるのは、足立結憂。そしてあの曲…

ニュースの報道の音が聞こえてくる「足立結憂さんの代表曲は、最後のシングル曲にして最大のヒット曲となった…」

小林　「ヌガー・グラッセが溶けるまで」

すべてが暗闇に飲み込まれるように、暗転。

シーン1

外で吹雪の音が強く聞こえている。直政が死体のように地べたに転がっている。近くには、イヤホンにつながれたスマホ。少しした後、補充するお菓子や清掃用具の入ったカゴを持ち、下手奥から従業員の近藤が入ってくる。近藤は気にかける様子もなく、机の上のお菓子の補充や掃除をはじめる。

近藤　死んだんすか？

直政　…。

近藤　死んだんすか？

直政　…。

近藤　直政くん。

直政　…。

近藤　死んだんすか？

直政　…死んだ。

近藤　生きてんじゃないすか。

直政　死んだの。もうおれは。
近藤　あ、そうなんすね。
直政　え、むしろ逆に聞くけど。おれ、生きてる？
近藤　僕にはそう見えますけど。
直政　マジでぇ。
近藤　はい。
直政　マジかぁ。
近藤　はい。
直政　おれ生きてんだなぁ。
近藤　そうなんじゃないすか。
直政　…じゃあもう、殺してくんないかなぁ。いっそのこと。
近藤　えー。
直政　こうなんか包丁とかで、こうグサッと。いやむしろこうロープみたいなもので、グイッと。
それかバールのようなもので、ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドーン！
近藤　もうチェックインはじまってますよ。
直政　いや、おれの話聞いてた？
近藤　ああはい。嫌ですよ。
直政　なんでだよ、やれよ。
近藤　犯罪者になりたくないんで。
直政　なれよ、おれのために。
近藤　いくら負けたんですか？
直政　え。
近藤　競馬。
直政　えー…これくらい？（指を１にする）
近藤　１万円。
直政　なわけ（笑）。
近藤　１０万円。
直政　ノンノン。
近藤　マジすか？
直政　マジ。
近藤　バカじゃないすか？
直政　ねぇ。
近藤　１００万？
直政　イエス。
近藤　ヤバ。もうなにやってんですか、マジで。
直政　絶対いけると思ったんだよ、今回は。

近藤　いっつもそうじゃないすか。
直政　今回は本当に本当だったんだって。
近藤　ああはい。
直政　な、死にたくなるのもわかるだろ？
近藤　よくそんな金ありましたね？
直政　あー、まあ。
近藤　え…またどっかで借りてきたんすか？
直政　うん。
近藤　返せるんすか？
直政　そこなんだよなぁ…おれ殺されちゃうかも（笑）。
近藤　え、そんなヤバいとこで借りたんすか？
直政　これで全部取り返せると思ったんだって。
近藤　ほんとなにやってんすか。
直政　ね。
近藤　女将さんは助けてくれるんですか？前に最後だって言われてましたよね。
直政　まあねぇ。
近藤　マジで狂ってますね。
直政　近藤くん、お願いしてみてくんない？
近藤　なんで僕が。
直政　あいついま機嫌悪いのよ。
近藤　知らないですけど。
直政　そんなこと言わずに、助けてくださいよ、近藤さーん。

旅行カバンやキャリーケースを持ち、従業員の斉藤、宿泊者の吉本・高木が上手から入ってくる。

高木　あ、やっぱりここにいた。
直政　あ、いらっしゃいませ。
斉藤　フロントに誰もいなかったので、お待たせしてしまっていたんですよ。
直政　あ、そうだったんですか。それは大変申し訳ありませんでした。
吉本　どうせサボってたんでしょ。
直政　いやいや、ちょっと用事がありまして…。
近藤　いや、サボってたじゃないすか。おれを殺してくれっつって。
高木　なにやってるんですか（笑）。
直政　お前それは…言うなよ。
高木　相変わらずだなぁ（笑）。

直政　ほんと、毎年ありがとうございます。
吉本　当たり前ですよ。もうこれ、僕らにとって恒例行事みたいなもんなんで。
高木　そうそう。足立結憂ファンとして、12月8日はここで過ごさないと。
吉本　デビューと引退の日。明日は一年で一番大事な日ですから。
直政　引退からもう7年も経つのに、こうやって愛してくれるファンがいるっていうのは、本当にありがたい限りですよ。
吉本　僕らは一生ファンですから。永遠ですから、僕らの愛は。
高木　それに私たちお兄さんにも会いに来てるんですよ。
直政　え、マジすか。
高木　クビになってないかって（笑）。
直政　なるわけないじゃないですか（笑）。ね（近藤に）。
近藤　…。
直政　ね（斉藤に）。
斉藤　…はい、そうですね。
吉本　来年はいないかもね（笑）。
直政　ちょっとやめてくださいよ（笑）。
近藤　僕、フロント見ときましょうか？
斉藤　あー、近藤さんは大浴場の方お願いしていいですか？
近藤　わかりました。
斉藤　あの、直政さん…そろそろ。
直政　あ、ですよね。
斉藤　はい。もう予約の方はいらっしゃらないんですが、念の為。
高木　ちゃんと仕事してくださいね。
直政　当たり前じゃないですか。
高木　（笑）。
直政　では、あさってまで、ごゆっくりお過ごしください。
高木　はい、よろしくお願いします。

直政、近藤は上手から出ていく。

高木　まあ斉藤さん、悪い人じゃないんで、クビにはしないであげてください（笑）。
斉藤　いや私にそんな権限ないので。
高木　えー、でも結憂ちゃんが婚約したって、あれ斉藤さんのことですよね？
斉藤　あ、見られたんですか？雑誌。
高木　もちろんですよ。7年ぶりの結憂ちゃんのインタビューですもん。
斉藤　なんか…すみません。

高木　え、なにがですか？
斉藤　多分、ファンの方にとってはあまり喜ばしい内容じゃなかったと思うので。
高木　いや私は全然。結憂ちゃんがみんなの前に姿を見せてくれたってだけで、私は十分です。
斉藤　すみません、ありがとうございます。
高木　で、どうなんですか？
斉藤　あ、そうですよね…はい、私です。
高木　やっぱり！私、前々から怪しいと思ってたんですよ（笑）。
斉藤　そうなんですか。お恥ずかしい…。
高木　おめでとうございます！え、結婚式はいつ挙げられるんですか？
斉藤　来年の4月を予定しています。
高木　じゃあもうすぐですね。
斉藤　そうですね。
高木　斉藤さんだったら、私たちも安心ですよ。ね。
吉本　うん…そうだね。
高木　え、なに。
吉本　ああ、いや別に…なんでもないんだけど。
高木　もう、そういうのやめようって言ったじゃん。
吉本　そうだけど。
高木　すみません、斉藤さん。圭一くん、ガチ恋だったみたいで。
吉本　別にそんなんじゃないけど。
高木　じゃあいいじゃん。
吉本　いやいいんだけど。でもあるじゃん、ファンだったら、そういうの。やっぱ本当だったんだっていうか、なんていうか…。
高木　全然わかんない。
吉本　それは高木さんが同じ女だからでしょ。いや…わかってます。いつかこういう日が来るってことはわかってたので…。斉藤さん、本当に、本当に、おめでとうございます。
斉藤　ありがとうございます。
吉本　幸せに…してあげてくださいね。絶対に。
斉藤　はい。
吉本　絶対に。
高木　重っ。
吉本　うるさいな。
高木　（笑）。

外から吹雪の音が強く聞こえる。

高木　うわ、ほんとぎりぎりだったなぁ。
斉藤　今回、山内さんと池本さんは残念でしたね、いらっしゃれなくて。
高木　そうなんですよ。２人はやっぱ遠いので、どうしても来られなかったみたいで。
斉藤　毎年４人でお越しいただいていたので、私もお会いできるのを楽しみにしてたんですけど。
高木　すみません本当。キャンセル料も融通きかせてもらっちゃって。
斉藤　いえ、この雪ですからしょうがないですよ。３０年ぶりの記録的な大雪だって言ってますからね。
吉本　よりによって、こんな日に来なくてもいいのに。
高木　本当、圭一くんと２人なんて最悪。
吉本　そんなのこっちだって、一緒だって。
高木　（笑）。
斉藤　本当に今日はおつかれさまでした。
高木　なんかもうクタクタですよ。
斉藤　今日と明日は、他のお客様もほとんどいらっしゃらないので、ごゆっくりされてください。
吉本　そうなんですか？
斉藤　はい。早めにお着きになられたお一人様以外は、キャンセルになってしまったので。
高木　まあ電車も飛行機も止まっちゃいましたしね。
斉藤　本当にありがとうございます。こんな山奥までご足労いただきまして。
高木　いや本当、私らは来られてよかったです。
斉藤　ではおつかれだと思うので、そろそろお部屋にご案内しますね。
高木　あ、はい。

斉藤、吉本、高木は下手奥から出ていく。吹雪の音が一層強く聞こえてくる。しばらくした後、足立結憂と三木典子が言い争いをしながら、下手奥より入ってくる。三木は手に雑誌を持っている。

結憂　だから後にしてって。
三木　朝からそんなこと言って、ずっと聞いてくれないじゃない。
結憂　仕事中だから。聞くからちゃんと後で。
三木　そう言って、いつも逃げるんだから、私から。
結憂　だって、どうせなに言ったって私の話なんて聞かないでしょ。
三木　聞いてくれないのは結憂の方でしょ。いくら電話したって取ってくれないし。
結憂　だからってここまで来る必要ないでしょ。偽名まで使って。
三木　それは悪かったって謝ったじゃない。
結憂　それってほとんど犯罪だからね。

三木　だから悪かったって。でもちゃんと話がしたかったの。
結憂　もう十分話したでしょ。
三木　話してない。
結憂　これ以上、なにを話せばいいの？
三木　（雑誌を見せ）だからこのインタビュー、なんで勝手に受けたの？
結憂　そんなの私の勝手でしょ。もう三木さんは私のマネージャーでもないんだし。
三木　それはそうだけど。それでもこんなこと話す必要あった？
結憂　だからそれは、そっちが先に仕掛けてきたからでしょ。
三木　…なにを？
結憂　「足立結憂が復活に向け、話し合いを開始」って。
三木　あれは…
結憂　そんな話、私したことあったっけ？
三木　あれは…勝手にあの出版社が書いたことでしょ。
結憂　ほんとに？いまさらそんなこと勝手に書くわけないと思うけど。
三木　知らないわよ、私はそんなこと。
結憂　三木さんたちが書かせたんでしょ。それ以外考えられないんだけど。
三木　でも私たちは関係ないもん。
結憂　ほんとに？
三木　うん…ほんとよ。
結憂　ほんとに？
三木　だから…ほんとだって。
結憂　正直に言って。じゃないと2度と三木さんとは話しができないから。
三木　だから…わかったわよ…私が書かせました。
結憂　やっぱり。
三木　どうしても私は結憂に戻ってきてほしいの。だって明日で7年だよ。7年。ずーっと私は待ってるんだから。それくらいしたって、しょうがないじゃない。
結憂　しょうがなくない。ルール違反よ、こんなの。
三木　こんなに怒るなんて、思ってなかったんだもん。
結憂　…。
三木　悪かったわよ…ごめんなさい。
結憂　期待させたってしょうがないじゃない。もう戻るつもりはないんだから。
三木　でも聞いたでしょ、あなたも。復活を待ち望むファンの声。なんとも思わなかった？こんなに時間が経っても、こんなにたくさんの人が足立結憂を求めてくれてるんだって。
結憂　それはまあ…
三木　うれしかったでしょ？
結憂　それに関しては、ありがたいなとは思ったけど。

三木　ほらぁ。
結憂　でも私は無理なの。ずっと言ってるでしょ。
三木　ちゃんとサポートする。ここで働きながらだっていいし。そこはこっちでちゃんとうまくやらせてもらうから。
結憂　ほら人の話聞かない。
三木　あのね、私も切羽詰まってるのよ。社長が怒ってんの。この雑誌。あなたが勝手なこと言うから。
結憂　まあ私もカッとなって、話しすぎた部分はあると思うけど。
三木　（雑誌を開き）そうでしょ、なんなのよ、これ。もう私は自分を犠牲にしたくないって。足立結憂は本当の私じゃない、だから私は、2度と誰かのために足立結憂に戻るつもりはないって。
結憂　だから、ちょっと話すぎたと思ってるって。
三木　こんなこと言われたら、私たちがあなたになにか悪いことしてたみたいじゃない。それに足立結憂の歌は、あなたの犠牲の上にあったなんて、ファンが聞いたら悲しむと思わなかったの？あなたが足立結憂を否定するなんて、信じてたファンを裏切ることだと思わなかったの？
結憂　わかってるんだって、そんなの私だって。
三木　あとこれ。あんなのは奇跡だった。私はもう奇跡は起こせないし、起こすつもりもない。

結憂は三木から雑誌を取り上げる。

三木　あ。

結憂は雑誌をゴミ箱に捨てる。

結憂　いいでしょ、もう。そうやってネチネチネチネチ。
三木　すぐ怒るんだから、そうやって。
結憂　こんなのわざわざ持ってこないでよね。
三木　まあとにかく、こんなこと勝手にやられて、会社の面目が立たないって、ほんとすごかったんだから。再デビューの話なんてもんじゃない、2度と業界に戻れなくしてやるって言ってんのよ。
結憂　いいじゃない、だったらそれで。
三木　よくないわよ。だから私、説得したから。結憂にデビューの話、OKさせて帰ってきますって。そうしたら、許して、再デビューさせてやってくれって。呑んでもらうまで、ほんと大変だったんだから。
結憂　なんでそんなにいつも勝手なの。
三木　私はどうしてもあなたに戻ってきてほしいの。

結憂　だから戻らないって言ってるでしょ。
三木　足立結憂は私の人生なの。
結憂　いくらでもいるでしょ他に。
三木　いないわよ、足立結憂の代わりなんてどこにも。

上手からリュックを背負った小林瞳が入ってきている。

小林　あの。
結憂　あ、いらっしゃいませ。
小林　あの…泊めてほしいんですけど。
結憂　はい。チェックインはお済みではないですよね？
小林　あ、いや、はい、まだ。誰もいなかったので、あの、入り口に。
結憂　大変失礼いたしました。
小林　ああ、いや。
結憂　本日のご予約はされてらっしゃらないですよね？
小林　あ、はい。でも、あの、お金はあるので。
結憂　はい、ありがとうございます。
小林　泊まれますか？
結憂　はい、大丈夫ですよ。ちょうどこの大雪でキャンセルされたお客様がいらっしゃるので、お部屋は空いております。
小林　じゃあお願いします。
結憂　この大雪のなか、大変だったでしょう。
小林　まあ、はい、なんとか、あの、がんばって。
結憂　本当におつかれさまでした。
小林　あ、はい。
結憂　ではご足労おかけして恐れ入りますが、一度フロントの方でお手続きいたしますね。

足立結憂は小林瞳を案内し、上手から出ていこうとする。

小林　あの。
結憂　はい。
小林　サインほしいんですけど（と「ヌガー・グラッセが溶けるまで」のCDを手にする）。
結憂　あ、ありがとうございます。懐かしいですね、CDまでわざわざ。
小林　私、ファンなんです。足立結憂、さんの。あの、とくにこれ、「ヌガー・グラッセが溶けるまで」は私の一番好きな歌で。言葉すべてが私に語りかけてくれるような気がして、私の人生を変えてくれた曲でもあって、だからこれにサインしてもらいたくて。

結憂　ありがとうございます。
小林　ああ、いえ。じゃあこれ（とCDとペンを渡す）
結憂　準備万端ですね（笑）。
小林　はい、途中で買ってきたんで。

足立結憂は小林瞳からCDとペンを受け取り、サインを書き始める。

結憂　あ、お名前もお書きしましょうか？
小林　じゃあ、お願いします。
結憂　お名前伺ってもよろしいですか？
小林　はい、小林瞳です。
結憂　小林瞳さん。
小林　はい。小林瞳です。
結憂　小林瞳さん（名前を追加している）。はい、できました（CDを手渡す）。
小林　あ、ありがとうございます。
結憂　いえ全然。こちらこそ、ありがとうございます。
小林　あ、はい。ありがとうございます。

小林はCDをうれしそうに眺めている。